

啓蟄

つい数日前、久しぶりに東京に行ってきました。ピリッとした空気の札幌から羽田に降り立つと、空気の暖かさに驚きました。

そういえば、3月6日は「啓蟄」でした。

札幌は、まだまだ寒い日が続いていますし、周りも雪だらけで「啓蟄」という言葉さえ思いも付きませんが、しかし、着実に春は直ぐそこまで来ていると感じたところです。

「啓蟄」の「啓」には「ひらく」、「蟄」には「冬ごもりのために虫が土の下に隠れる、閉じ籠もる」という意味があります。ここから、「土の中で冬ごもりしていた虫達が暖かさを感じて、外に這い出てくる」3月6日頃のことを「啓蟄」といい、二十四節気の一つとされています。

「蛇穴を出づ」「地虫穴を出づ」「蟻穴を出づ」「虫出しの雷」等も「啓蟄」と同様の意味で、俳句では季語として良く使用されています。

啓蟄のひとり兎ひとりよちよちと（飯田蛇笏）

大蛇や恐れながらと穴を出る（小林一茶）

啓蟄の蚯蚓の紅のすきとほる（山口青邨）

飯田蛇笏の句には、やっと歩き始めた幼子の様子、土の中からやっと地表に這い出した虫になぞらえて謳ったもので、ほのぼのとした感じがします。また、小林一茶の句には、地中から恐る恐る顔を出した蛇をユーモラスに捉えています。一方、山口青邨の句は、光の当たらない地中から出てきたミミズの生命力といったものを感じさせます。

気象予報士の菅井貴子さんによると、一日の平均気温が10度以上になると春の暖かさが土の中まで届くようになり、虫たちも活動を始めるのだそうです（同氏著「北海道のお天気ごよみ365日」）。南北に長い日本列島ですから、既に各地では、沢山の虫たちがそろそろ外に出ようと動き始めていることでしょう。まさに、「蠢動」という言葉がぴったりで、私たちの目には見えないと

ころで命の営みがあり、虫たちの息づかいまでもが伝わってくるようです。

北海道では、10度以上になるのは5月上旬から6月上旬ということですから、虫たちはまだまだ眠りから覚める様子はありません。

しかし、暦は春、間もなく春分の日を迎えます。我が家の周辺を見ても確実に雪解けが始まっています。「啓蟄」は「さあ、やるとするか！」と、自分で自分にいい聞かせる日なのかも知れませぬ。

着る物のほとんど疲れ地虫出づ（翔）

去年は、辛いこと、憂鬱なことが沢山ありました。だからといって何時までも、寒い寒いと着ぶくれして家の中で縮こまっても仕方ありません。そろそろ明るい太陽の下に飛び出しましょう。（塾頭 吉田 洋一）